

# 巻 頭 言

日本白鳥の会会長 松 井 繁

我々、日本白鳥の会も発足してから、満10年になりました。四ツ谷の主婦会館での設立総会には出席者40名でしたが、現在は150名もの会員から成立しています。

白鳥を愛する、白鳥の保護に携わる人間が日本中に散らばっているそれぞれの白鳥渡来地の人々の横のつながりとして設立したこの会には、当初、2つの目的がありました。

ひとつは、この会を話しあいの場、情報交換の場として、白鳥保護の改善をはかろうというもので、餌付けの是非、環境問題など今も熱い論議が続いていますし、標識のとりつけ、渡りのルートの解明など、広い視野で我々の共通の問題を考えることに、ひとりの力よりもみんなの力、まして同じ志をもって、利害関係でなく白鳥を中心にして集まった会の力はこの目的をたしかに果たしているといえましょう。新しい問題、新しい疑問は、常に生まれてきます。お互いの積極性でこの力を育てていきたいものです。そして、もうひとつの目的は、国際白鳥会議の日本への誘致、その中核になる団体を、作ろうという、これは、昭和46年の第1回の国際白鳥会議に出席された、吉川、本田両氏の提唱でありました。この我々の夢とでもいうような大きな計画も、御承知のように、昭和55年の、札幌における第17回 I. W. R. B. (The International Waterfowl Research Bureau) 代表者会議、そして、第2回国際ハクチョウ・シンポジウムで果たすことができました。私ももちろん、みなさん一人一人にとって生涯忘れられない出来事と思われまふ。

国際会議では、イギリスのスコット卿、マシューズ博士を始め、本当にすばらしい出席者を迎えることができ、我々は世界の白鳥研究者や機関団体との交流ができる様になりました。文字通り“世界の広さ”を知らされましたが、当時、アフガニスタン問題のために白鳥のことも最も関わりの深い隣国、ソビエトからの出席者を迎えられなかったことが非常に残念であったのも事実です。それが、この昭和58年、日本野鳥の会の招きで来日した、ソビエトのコンドラチェフら三氏を、9月の我々白鳥の会の総会に招待することができました。私たちが長年にわたって持ち続けてきた問題を話しあい、質問をすることができ、多くの疑問が氷解しました。更に嬉しいことには、藤巻裕蔵会員を窓口に、これからの交流も可能になりました。一方、編集委員の努力のおかげで、会誌も英文タイトルが付き、抄録も英文になり、外国の学者にも送ることができる様になったことは大変有難いことで、今回もこの会誌をソビエトの学者に贈り、大変喜ばれました。

この10年をふりかえって、もちろん、すべてがスムーズに、うまくいっていたわけではありませんが、会員のほとんどが、他に自分の職業をもち、生活をもちながらも、こうして力をあわせて、大きな事業を果たすことができました。私たちはこの10年をかけて、国内にも国外にも、たくさんのパイプラインを、作りしました。そしてこれからが第1歩なのかもしれません。白鳥に魅せられた、あの純粋な気持を忘れずに、会員全員で、新しい一步を進んでいきたいと思っています。今後は、この交流のパイプをさらに太くすること、定時定点観察の強化などに力をいれるつもりです。皆さんの一層の協力をお願いいたします。(この度の叙勲で大森副会長が白鳥その他の自然保護に尽くされたことから勲六等旭日章を受けられました。御本人は勿論ですが、我が会としても、大変嬉しいことで、ここにご報告します。)